

第50回 日本書展 審査所感

【漢字作品】角元 正燦 (かくもと せいさん)

日展特別会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表

学書は臨書が、最善の訓練方法で唯一無二である。手本（古典）とするものは、書格の高い書を選んでください。結果として限られます。今回も空海の風信帖が多く出品されており、手本の選び方は良かったです。手本と同じように書けるよう練習を積み重ねて、筆法の合理性を探究することが必須であり、今回の審査では、練習を積んだと伺える作品を選びました。

臨書には形臨、意臨の二種があるといわれます。両方が複合して書表現ができます。意臨を書きたい方も、まずは形を極めることをお勧めいたします。

それぞれの書体を比較することで、臨書のあるべき姿が解ります。各書体の表現様式は、時代背景、文化、様々な条件が交錯して出来上がります。その背景を学ぶことは、どの書体を書くにおいても重要です。それを知らずに書くことは、基礎工事を怠るような危うさがあります。形臨派、意臨派も一度は双鉤填墨の必要があります。

臨書に当たり、自分の方へ引き寄せすぎないように、誤字に見えないよう注意してください。

【かな作品】土橋 靖子 (つちはし やすこ)

日展監事 読売書法会常任総務 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇巨匠

平安時代に生まれた仮名は、日本の風土の中、文学や日常を土壌として、現在も脈々と伝わり生き続けています。特にその芸術的・歴史的価値や魅力は、古筆という形で今も燦然とした輝きを放ちながら存在しています。

その平安古筆を真摯に臨書した労作が、今年も約200点集まり、この度厳正な審査が行われ、多くの力作からさらに良いものを選びさせていただきました。

仮名の原寸臨書は、緻密さ正確さが求められ、いわゆる「重箱の隅を突く」ような忍耐強さと高い技能が必要です。その上で、さらに古筆の持つ墨色の美しさ、形骸のみに終始しないリズムや生動感が表現できていることが、より高度な臨書作品と言えましょう。

拡大臨書においては、原寸臨書と一線を画し、各自の古筆に対する受け止め方、解釈が必要となります。舞台が机上の原寸から半切に拡大した以上、単なる拡大に終わらず、紙面を把握する何某かの工夫が必要です。それは線や構成、または拡大により古筆の細部の分析を意識するというでもいいでしょう。それらを踏まえながら古筆と向き合うことも、その先にある会場芸術としての大字仮名作品制作の一つの有効な勉強法になるはずで

臨書は書を学ぶ上で最も大切なものであることは言うまでもありません。学べば学ぶほど気づきがあります。終わりはありません。それぞれのさらなるステップアップを目指し、これからも仮名の魅力を共有し、豊かな時を過ごして行きましょう。

次回も多くの方のチャレンジをお待ちしています。

【篆刻作品】和中 簡堂 (わなか かんどう)

日展会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会監事 「日本の書展」現代書壇代表

今回の出品者が篆刻の対象としたものに、古銅印では戦国時代の官・私璽を含め完成度の高い古璽、また、前・後漢三国の印の秀逸なもの。名人印では鄧石如、呉讓之、趙之謙、徐三庚、呉昌碩、珍しいところでは鄧散木というものもありました。日本の印人では河井荃廬。これらの中でも鄧石如、徐三庚、河井荃廬に取り組み、真に迫ろうとする努力を重ねた痕跡を窺える、精緻な篆刻があったのは嬉しいことです。

篆刻と言っても原印に対し、生きた線質で刻らなければ篆刻を学んだことにはなりません。古典とされる先人達の名印は、分間布白、構成の妙、疎密のバランスなど、様々な要素を会得する宝庫だと思います。鄧石如の系統を学ぼうとする傾向が圧倒的に多いのは、小篆を自然な方法で印面に取り入れ、篆書の筆意が顕わになり、親しめる形態に変化させたからです。鄧派とひとくくりに言いますが、各家特徴が異なります。是非、挑戦してみてください。

徐三庚の多字印を見事に再現した手腕にも感心しました。篆刻を楽しみ、自用印や身近な人への用印に発展させ、名句、成語に及び、大いに篆刻に親しんで下さい。篆刻を繰り返して、新たな着想が生まれてくるのだと思います。